

私は、昨年6月サラリーマン生活にピリオドをうった。以前アメリカでは、ハッピーリタイアメントというのがあると聞いたことがあり、そのことの憧れに似た気持ちを抱いたことを思い出し、今の自分に何が出来るかを考えてみた。

私は、10年前から毎年秋に、京都に旅することを続けていた。故事来歴のある古都の神社仏閣を訪ねつつ、紅葉の風景を眺め散策した。おおかたの所に足跡を残したと思ったとき、これまで訪れたことのない奈良のほうに眼が向いた。その土地は京都と違って、未知のものに多く包まれた魅力的な世界があるのではと期待した。それまで奈良については、和辻哲郎や亀井勝一郎、白州正子の本を読み、さらに入江泰吉の写真集で色々とイメージを膨らませていただけであったが、実際に足を運ぶ段になって、歴史の現場にたたずんでいる実感にとらわれ、興味は広がる一方である。京都と違って奈良には、古代の歴史がありロマンがあることを改めて知らされた。ことに明日香の里はよそにない魅力がある。黒岩重吾の古代史小説を読むようになったのはその頃からである。聖徳太子と蘇我一族の盛衰、額田王をはさんでの中大兄皇子と大海人皇子の愛憎と権謀の飛鳥の宮廷、さらに藤原一族の権威と勢力の台頭など、これらの物語を背景に、石舞台古墳、酒船石遺跡、高松塚古墳、キトラ古墳などが次から次へと、謎を秘めたままの道具立を前に、甘檜丘に登れば、眼前には大和三山が開け、遠くには二上山が眺められる。このようなところは日本のどこにも見当たらない。

おそらくこれからも遺跡発掘のニュースに心をときめかせ、これらの講演会があれば飛んでいくことになるだろう。小説のほうの興味も更に広がって、卑弥呼の世界に入り、おそらく万葉から古事記までたどり着くのはそう時間はかからないだろう。旅のほうも、奈良盆地の中をかけめぐり、山の辺の道や吉野の里へと続いていくに違いない。遺跡の発掘の現場の出会い、そこで出会ったボランティアの案内人の話に時間の経つのを忘れてしまうのも、旅の楽しみである。まさに歴史の宝庫といえるだろう。

現在の何にも縛られない自由な生活の中で、自分の好きなことに惜しげもなくのめりこんでいける至福の時を味わっている日々である。